

氏 名	高 正子
学位（専攻分野）	博士（文学）
学位記番号	総研大甲第 825 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 24 日
学位授与の要件	文化科学研究科 地域文化学専攻 学位規則第 6 条第 1 項該当
学位論文題目	韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者－解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から－
論文審査員	主 査 教授 松山 利夫 教授 朝倉 敏夫 教授 笹原 亮二 教授 伊藤 亜人（東京大学） 客員教授 崔 吉城（東亜大学）

論文内容の要旨

本論文は、韓国の仮面劇「固城五広大」の人類学的調査にもとづき、その担い手である演戯者の視座から、解放後の韓国社会における伝統文化の伝承について考察したものである。

これまで韓国では伝統文化は、本質的に変わらない核をもち、時代を越えて永続的に脈々と受け継がれたものとして語られ、それが民族文化ととらえられていた。このような傾向は、仮面劇をはじめとする民俗芸能研究にもみられ、その内容は起源や原理といった発生論的研究に終始していた。また、国家による文化政策や民衆文化という視点から見られていたために、そこでは、文化の担い手としての演戯者は「語り」のなかでのみ存在していた。

仮面劇は、植民地期に人々の注目を集めたが、それは仮面劇がもつ両義性ゆえであった。つまり、両班を諷刺する仮面劇は、植民地統治者には統治の正当性を示すものと解釈される一方で、朝鮮人研究者には民族的なアイデンティティの拠りどころとして解釈された。この相反する二つの解釈が交錯するという仮面劇の特性は、解放後もなお引き継がれた。1960年代に登場した朴正熙が推し進めたのは、近代的な国民国家形成であり、その過程で「大韓国民」が生成された。この国民生成のなかで、一地方の民俗芸能にすぎなかった仮面劇は、「国民文化」へと押し上げられていった。他方、国家による強引な近代化・産業化政策がもたらした社会矛盾に反発する学生や知識人は、国家による上からの国民形成に対し、下からの民族志向として「民衆」を求め、仮面劇を民衆のシンボルとみなした。この国家と反体制的な学生や知識人との対立を一段と激化させたのが、1980年代の韓国社会の政治的状況であった。国家は反政府運動とのせめぎ合いのなかで、膨大な国家予算をつぎ込んで文化の担い手を取り込もうとした。このような、国家とそれに抗う運動との緊張関係のなかで仮面劇は、「伝統文化」へと格上げされるとともに、「抵抗」のシンボルとして位置づけられた。

本論文は、こうした韓国社会における仮面劇をめぐる言説を検証しつつ、それに対し固城五広大の担い手である演戯者が、いかに応答していったかを明らかにした。まず、植民地期の演戯者の階層を検討し、これまで固城五広大の演戯者が農民であるとした定説は誤りであり、かれらが有力な郷吏の子孫であるという事実を明らかにした。つぎに、演戯者が仮面劇の伝承の「場」を変化させたことに着目した。朴政権が仮面劇を無形文化財に指定すると、かれらは自由で任意の場から社団法人の保存会を誕生させた。こうして誕生した保存会の内部に、国家は演戯者間の競争をもたらし葛藤を持ちこんだ。この保存会内部におきた競争や葛藤によるエネルギーを、演戯者は大幅な芸能の書きかえ作業に注いであった。その結果「全国民俗芸術競演大会」において大統領賞を受賞した。そして、この受賞が、保存会の様相を変えるものとなった。これを機に学生への研修がはじまり、そのことが保存会の会長の座にふさわしい人物の資格を変えた。すなわち、会長には国家との交渉に長けた実務者から、学生を教授する能力と実務能力を兼ね備えた者が求められ、また輪番制から特定個人による会長の長期化を招いた。このことによって、固城五広大保存会の組織は拡大したが、反面、演戯者間の葛藤は深化するいっぽうとなった。

1990年代に入ると、韓国社会は民主化を成し遂げるなど大きく変化していった。これと

相まって保存会内部にも大きな変化がもたらされた。第2世代の李潤石が新会長になることによって、演戯者間で繰り広げられていた会長をめぐる確執に終止符が打たれた。この世代交代により、これまでの不透明で非民主的な保存会の運営が刷新された。具体的には、疎外されていた第2世代の会員を中核に据え会員間の和合が求められた。また、葛藤の原因であった伝承者選定の内部基準を定めるなどの改革が試みられた。このような努力の最中におこなわれたのが、2000年3月の芸能保有者選定審査であった。ここでは「伝承者はだれによって決められるのか」というヘゲモニーをめぐる争いが問題となった。国家（正確には国家から権限を委譲された知識人＝学者）は、李潤石会長を国家の権威に挑戦したとみなし、かれの芸能が未熟だとして芸能保有者にすることを留保した。この問題をめぐって保存会に内在していた葛藤が可視化された。しかしながら、かれらはこの問題の本質を見据えたうえで、国家の政策や国民文化の枠組みを、かれらなりに再解釈し、国家との折りあいをつけていくという対応をとった。

続いて、こうした演戯者の集団の葛藤や変化の動態が、芸能の内容にいかん表出されているのかを検証した。その際、文字で表された台本、身体動作、仮面や衣装・小道具といった立体的な側面から実証した。このなかで明らかになったのは、国家をはじめとする知識人たちによる仮面劇の標準化・類型化がおこなわれ、そのことが、その後の仮面劇の内容に変化をもたらしていったことである。一方、こうした変遷は、国家や外部の変化への応答であり、と同時に演戯者たちが自ら創り出すイメージにあわせて芸能を書きかえるといった「再生産」の結果であることも判明した。さらに、テキスト・身体動作・仮面や衣装・小道具が有機的な関係にあり、これらのすべてにおいて「再生産」がおこなわれていた。そうした行為を演戯者たちは、固城五広大の「創造」ではなく、「固城五広大の発展」ととらえている。つまり、古いものを伝え受け継ぐという伝承とは、同じものではないことが明らかになった。

解放後の韓国社会で、文化の担い手である演戯者は、国家や反体制的な知識人といった外部から押しつけられる理念的な「語り」を、固城五広大を継続するために受け入れた。かれらの行為は、外部に対する対応という従属ではなかった。だからといって、抵抗でもなかった。かれらは、かれら自身の生活や経験から、かれらなりに読みかえながら「再生産」していったのである。すなわち、そこから見えてきたものは、政治的な文脈で語られる「文化」が、その担い手に押しつけられたとき、かれらは自分たちの文脈でそれを読みかえ、もしくは書きかえながら、それを「行い続けている」という事実である。

この固城五広大の事例から、これまで自明のこととされてきた伝統文化や伝承という概念とは違う実態がみえてきた。本来、変遷をともなうという伝承は語義矛盾である。にもかかわらず、外部の国家や反体制的な知識人も内部の演戯者も、仮面劇は「伝承」されているという。つまり、仮面劇は「伝承される文化」なのである。しかしながら、本論文で着目するのはまさに「変遷をともなう生産された文化の伝承」という矛盾である。そうした視点をふまえた伝統文化研究を本論文は提起するものである。

論文の審査結果の要旨

本論文は、解放後の韓国社会において「伝統文化」がいかにかに伝承されているのかを、仮面劇を事例に演戯者の視点から記述した民族誌的研究である。韓国の仮面劇はこれまで、その起源や原理などの発生論的研究や植民地論、民衆文化論として韓国人研究者によって捉えられてきたが、筆者は日本の民俗芸能研究をふまえて、仮面劇の内容の変遷や演戯者の語りを記述し、その伝承の実態を明らかにしている。

研究対象とした慶尚南道固城郡の仮面劇「固城五広大」は、1900年代という比較的新しい時代に始まったものの、この地が近代化・産業化の遅れた地域であったため、韓国人が思い描く「伝統文化」に結びつけられていった。筆者は、1990年にこの仮面劇の研修を体験し、その後本研究のために約1年7ヶ月間のフィールドワークを行った。

本論文の第1章では、植民地期から現在に至るまでの韓国社会における仮面劇の政治的・社会的意味を考察する。仮面劇は、植民地期には、植民地統治者と朝鮮人研究者との間で相反する二つの解釈がなされ、解放後には、政府側が国民国家形成における「国民文化」として捉える一方、反体制的な学生や知識人は「民衆」の象徴として捉えたと述べ、この両義性が「固城五広大」仮面劇を人々に注目させる要因になったと論じる。

第2章では、「固城五広大」の担い手である演戯者に着目し、その伝承の過程を歴史的に辿っている。まず、植民地期の調査資料にもとづき、当時の演戯者たちは郷吏（下級官僚）の子孫だったことを明らかにする。ついで、地域の老人が集う敬老堂という任意で自由な場から、1964年の無形文化財指定後の保存会の誕生へと、仮面劇の伝承の「場」が変化したことを示し、この保存会の発展の過程を追跡する。さらに、第3章では、保存会の会長交代と2000年の国家による「伝承者選定審査」をめぐる経緯を通して、1990年以降の保存会内部の変化と、保存会と国家との関係を考察する。

第4章では、これまでに残された台本や映像資料に基づき、台本の台詞やト書き、舞踊の身体動作、仮面・衣裳・小道具を総合的に比較分析し、仮面劇の芸能の変遷を検証する。ここでは二つの時期に大きな変化がみられたことを指摘し、1964年の文化財指定以前に、仮面劇の標準化・類型化作業が行われ、1974年の「全国民俗芸術競演大会」での大統領賞受賞時に、舞台芸術の専門家を招き舞踊の再構成を行ったという。その結果、仮面劇「固城五広大」は、厄払いの意味を付加するために「両班」が「五方神将」に、風刺を強めるために「下男」が「両班の総領息子」に、衣裳の素材が綿からカラムシに変化し、舞踊が自由な舞踊からストーリー化されて伝統舞踊の様式を取り入れるなど、原形を生かしながらも洗練された芸術性をもつものに変化したとする。このように本論文は、台本、身体動作、仮面・衣裳・小道具それぞれの具体的な変化に着目し、仮面劇の伝承の実態を詳細に記述している。これは従来の研究にはみられなかった点であり、大いに評価できる。

筆者は文化構築主義的立場にたちつつも、実際の文化の担い手である演戯者の視線をとりいれようとしたため、筆者が演戯者と同一化し、文化の伝承に関する理論的分析がややものたりないきらいがある。また、仮面劇の伝承に関する演戯者やその周辺の人々の声を記述したものと、仮面劇の変遷を映像によって示したDVDとを付録としているが、これらの資料が必ずしも詳細に分析されていないのは惜しまれる。

ただし、これらは今後の課題とすべきものであり、本論文は演戯者の視点にたって韓国

仮面劇の伝承の実践を総合的、実証的に明らかにしており、韓国における「伝統文化」研究に資する労作である。したがって本論文は、学位を授与するに値すると判断する。